

3月2日(土)には高校の卒業式、19日(火)には終業式、中学校卒業式と、年度末の行事が終わりました。今、学校は新年度に向けての準備に慌ただしい状況です。

高校卒業式では、協創賞コンテストで最優秀賞を受賞したMiaさんの「大西洋横断」と題した発表について触れました(「羅針盤」前号でも紹介)。「人生は一度きり。悔いの残らないような生き方を」という父親の言葉について改めて触れ、式辞としました。中学校卒業式では、陸上・山縣亮太選手が9秒95の日本新記録樹立した(2021年6月)ことについて触れました。追い風(2m)を味方につけて達成できたのは「神様のご褒美」と父に話したそうですが、お父様が「誠実に、愚直に取り組んできた亮太だから」と納得されたというエピソードを交え、式辞としました。



(高校卒業式、右側が答辞を読んだ川原直生君)

「失敗は挑戦の糧」

高校1学年の学年通信「AIM HIGH」(第8号)に以下の文章が記載されていました。学年主任の承諾のもと、紹介いたします。

3月13日、宇宙事業会社スペースワンのロケット「カイロス」の打ち上げが失敗に終わった。これを受けて同社の会見が開かれたが、その中での豊田正和社長の言葉が印象深い。彼の言葉はこうだ。「スペースワンとしては『失敗』という言葉は使いません。一つ一つの試みの中に新しいデータがあり、経験があり、それら全てが今後の挑戦の糧(かて)と考えているからです」。

1年生を終えるこの素晴らしい日に、なぜロケット打ち上げ失敗の話なのかと思う人もいるだろう。しかし、豊田社長の言葉の中にこそ、みなさんが今後の人生の中で持ち続けていて欲しいことが表されている。おそらく、この1年間、一つも失敗しなかった人はいないだろう。もし「自分はこの1年間、何の失敗もしなかった」と言える人がいるならば、その人はこの1年間、何も挑戦しなかった人だ。

おそらく、この先の高校生活、いや、人生の中で数えきれないほどの「失敗」を繰り返すだろう。大切なのは、その一つ一つを「データとし、経験として」今後の糧とすることだと思う。高校1年生を終えるにあたり、みなさんにそのことを伝えたい。

高校1年生の最後、残りの2年間の高校生活を送る上において、高校2年生の1年間が特に大切になるよ、というメッセージに受け取れました。失敗こそが生きる上において大切なこと、失敗こそが学びの要諦なのだということを伝えていきます。豊田社長の言葉、学年主任の想いに納得せざるを得ません。

3月21日(木)、今年度最後の職員会議がありました。すべての議題を終えた後、教職員に対し

て、今年度の労いとお礼、そして、次年度に向けての想いを短時間ながら話しました。冒頭で左記の文章を読み上げ、私たちにも同様のことが言えるのではないかと繋ぎました。「1年間、生徒の成長のためにさまざまな取り組みを行ってききましたが、その取り組みを振り返ると、失敗ではないにしても、上手くいかなかったことや思い通りにいかなかったことが少なからずあったはずです。そのことについての反省は、必ず次年度への取り組みや展開に活かされるはずですよ」と。また、「次年度は、『協創』という言葉これまで以上に意識していきたい。協働して価値を創造することとは勿論のこと、高め合うとか、学び合うといった〇〇し合うという意味合いも『協創』という言葉には有ります。そのためには挑戦を惜しまないことです。上手くいかなかったら、それをバネに更に挑戦しましょう」と話しました。

ホンダ(本田技研工業株式会社)の創業者である本田宗一郎氏の名言に、「チャレンジして失敗を恐れるより、何もしないことを恐れる!」という名言があります。未知の域に飛び込むことは誰でも勇気が要ることです。失敗したらどうしようと考えあまり、怖気づいてしまうのが通常でしょう。しかし、「踏み込む勇気」が自分を動かし、変えるのだと信じ、何もしないことを恐れる自分になりたいものです。

ところで、私は「言葉には魂が宿る」という古来より日本人が大切にしている感性である「言霊」を信じています。ポジティブな言葉を言えばポジティブに、ネガティブな言葉を聞けばネガティブになるというようなことです。この「言霊」という考え方からも、挑むとか、踏み込むとか、やりきるなどのポジティブな言葉を用いてこそ自己成長を促すことができるのです。ポジティブな言葉を発し、挑戦し続けていきましょう。